

住宅における高齢者の血圧の24時間変動について —夏季における実測調査—

郡山女大 ○佐藤篤史 日本大 吉田 燦

【目的】東北地方の低温環境下で脳血管障害の発生率が高いことは以前から知られているが、統計的な調査や実験室での実験が主としておこなわれており、日常生活における調査報告は少ない。本研究は、脳血管障害に関連の深いと考えられる血圧変動の特性と、室温との関連を把握することを目的としており、その基礎資料を得るために、夏季におこなった日常生活における24時間血圧測定を報告するものである。

【方法】1995年夏季に、郡山市内に居住する高齢者男性2名、女性2名、青年2名を対象に、各住宅24時間づつ実測調査をおこなった。測定項目は次の通りである。①24時間血圧測定（10分間隔で自動記録）。②皮膚温測定（2分間隔で6点を自動記録）。③住宅熱環境測定。④生活行動の記録（記録用紙に記入）。⑤住宅構造。⑥生活状況調査。

【結果】血圧にも体温と同様に24時間の周期リズムがあるが、高齢者のうち男性2名は高血圧と診断されており、24時間を通して高い値を示していた。高齢者の女性2名は日常的に家事労働をおこなっており、その時間帯に血圧が上昇する傾向がみられた。また、青年と比較して、高齢者の血圧は変動幅が大きいことが認められた。高齢者が住宅内で事故を起しやすい場所としてトイレがあるが、夏季の測定では高齢者、青年ともにトイレに行くことによる急激な血圧変動はみられなかった。トイレの形態が様式であることと、夏季であるため温度変化にさらされないためであると考えられる。さらに、高齢者の血圧が急上昇する時間帯として起床時があるが、覚醒、起床の段階では血圧は変動せず、着替や洗面などの行動により変動が起っていた。皮膚温と血圧の相関は認められなかった。